

2020/09/2613:35

9月20日、憲法9条を守る一宮市民の会・尾西が主催して、「憲法9条平和の集い」(帰ってきた日章旗と父への思い－戦争遺族の話聞く会－)が尾西生涯学習センターで開催された。今回は、コロナ禍の下で3密を避けながらの開催で、25人の参加者がありました。講師は、「愛知平和遺族会」の山田隆幸さんと青木正雄さんです。

山田さんは、フィリピン・ルソン島で父が戦死。現在ドキュメンタリー映像の収集や聞き取り・文献をもとに、戦争の惨禍をDVDに編集し、語り部として各地で活動されています。また、青木さんは、ペリリュー島で父(数雄)が戦死。遺品の「血染めの日章旗」が米国から戻ってきたこと(2013.8)をきっかけに、ペリリュー島の戦いについて調査・研究を進め、山田さん同様に語り部として全国各地で活動されています。第一部では、DVD「映像で見る愛知戦史 第11集「銃後の守り－生活の中の戦争－」を、山田さんの解説を交えながら視聴しました。

映像の解説では、キーワードとして、「①熱狂：統制下のラジオ、新聞、映画が国民をあおった。②自粛警察：国防婦人会、隣組(町内会)③靖国詐欺：「やってる感」であざむく」を掲げ、DVD映像の合間にそうした歴史の事実を解説。そして最後に、「過去を語り継ぐことは、今を見つめ、明日を見通すこと」だと説明しています。

DVDの映像は、戦争の貴重な記録写真などが編集されており、国家総動員体制の戦前の銃後の様子などが文字では伝わらない迫力をもって迫ってきます。

配布された学習会資料では、「(1)安倍前首相の靖国参拝(2013.12、2020.9)、(2)なぜ熱狂が生まれたか 歴史の学び直し・・・エロ・グロ・ナンセンスの中で日中戦争はじまる－一億火の玉 国家総動員法(一億総活躍) 体力は国防力、(3)子どもは明日の戦力、(4)兵営化した中学校(旧制)ヒトラーユーゲントと愛知一中総決起事件、(5)戦後処理のごまかしと今も続く靖国詐欺 戦死公報は信頼できるか－書類焼却通達 ふたつの遺族会、(6)平和運動と戦没者足跡調査と遺品の保存－愛知遺族会の活動」などが紹介されています。

私は、7年8ヶ月に及ぶ安倍政権の平和より軍事優先の、そして憲法と立憲主義破壊の政治、特に公文書の改竄、破壊、隠蔽、偽造、そして国会での虚偽答弁や桜を見る会での反社勢力との癒着など、権力の私物化による戦後最悪のモラルなき政治(菅政権はその安倍政治を継承すると明言)と、今の日本のコロナ禍における政府の思いつきの対応などを見るにつけ、戦前の軍国日本社会とほとんどダブってさえいるように思いました。

マルクスは、「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」の冒頭で次のように述べています。「ヘーゲルはどこかで、すべての偉大な世界的事実と世界史的人物はいわば二度現れる、とのべている。彼はこう付け加えるのを忘れた。一度は偉大な悲劇として、もう一度は惨めな喜劇として、と。」戦前の軍国日本社会が戦後に日本国憲法を残したという意味で”偉大な悲劇”というなら、戦後の安倍政治は戦前を真似ようとした”惨めな喜劇”でしかなかったと言えるかもしれません。しかし、それにしても安倍は、その憲法を蔑ろにしてよくもまあこれほどまでに日本社会を墮としめてくれたものです。我々は、彼が残した戦後最大の「負の遺産」を片付けなければなりません。

第二部では、いよいよ父数雄さんが身につけていた「血染めの日章旗」が米国から戻ってきたことをきっかけに、ペリリュー島の戦いについて調査・研究を進めてこられた

青木正雄さんの DVD を交えながらの話です。

(学習会資料としての DVD は、35 分用と 13 分用があるが今回は 13 分用を使用した。)

DVD の解説資料では、そのタイトルが「◆続、還ってきた日章旗・還らぬ父たち

映像で見る戦争の狂気－非情の命令・玉砕を禁ず－」で、3 部構成です。

「第 1 部、国民を戦争に駆り立てたもの、第 2 部、日米両兵士の憎悪がぶつかる狂気、それをあおるプロパガンダ (宣伝)、第 3 部、戦争犠牲者の追悼とアジア侵略の謝罪」です。この構成を見て分かるように、戦争へ至る道がどのように国家によって敷設されて行くのか、そして戦争の実態が如何に憎悪と狂気に満ちたものなのか、その結果としての戦争犠牲者を、我々はどのように受け止めるべきなのかが如実に示されていることです。憲法 9 条平和のつどいの案内チラシで青木さんはいいます。「私は戦争の狂気を語ることが、平和憲法を守ることだと考えました。還ってきた日章旗が、私に平和を語る新しい宿題を課しました。もっと多くの人に知ってほしい。」と。

青木正雄さんを戦争の語り部としたのは、戦死した父 (數雄さん) が身につけていた血染めの旗が 2013 年 8 月に、当時米兵が戦利品として持ち帰っていたアメリカから戻ってきた事によります。青木正雄さんの父數雄さんは、1944 年 7 月、特設第 35 機関砲隊の一員としてペリリュー島に上陸。当時 33 才で 3 度目の召集でした。

「中部太平洋方面部隊略歴」によると、この部隊は、ペリリュー島上陸後、不眠不休で陣地構築に従事。米軍が上陸した 9 月 15 日は、「数倍に余る敵に対し最後の兵まで肉攻斬り込みに徹した」と記されています。この時の様子 (主に米兵撮影の映像) が 35 分用の DVD には生々しく記録されています。愛知県の「戦没者の軍歴調査について」の回答 (26 地福号外平成 26.9.3) では、數雄さんについて、最終所属部隊「特設第 35 機関砲隊」、身分「陸軍軍曹」、戦没年月日「昭和 19 年 12 月 31 日」、戦没場所「パラオ諸島ペリリュー島」、軍歴「別添履歴書のとおり」と記されています。

父からの遺品－「祈、武運長久」(写真) と記した「血染めの日章旗」が 2013 年 8 月に戻ってきた事で、青木さんは、父の生き様をしっかりと見つめ直す機会を得て、「二度と戦争を起こさないための語り部として行動することが、私の今後の人生の指標とすべきだ」という気持ちが固まりました。この日章旗こそ私の人生、語り部活動の原点です。」と語っています。(「血染めの日章旗が私たちに語ること」 p 3 より)

DVD の映像 (35 分) もこの間のペリリュー島での戦闘について、凄惨な戦争の実像を生々しく映し出しています。第 1 部でも紹介された山田さんとの DVD による戦争の語り部としての共演で、会場は 75 年の時差を忘れさせる熱気に包まれたことを印象深く感じました。それは現在、パンデミックのコロナ禍の中で、大国同士が対立と抗争に明け暮れている場合ではないこと、資本主義的生産様式の行き詰まりが我々に突きつけている矛盾のはけ口としての戦争があってはならないこと、過去のそうした矛盾のはけ口としての二度にわたる世界大戦の悲惨な結果をしっかりと受け止めて、我々はどのように解決していかなければならないのか、あるいはどのような方向に進んではいけないのかについて、今回の「憲法 9 条平和の集い」は、戦争の悲惨な実態 (狂気) を語り継ぐ事で、確かに我々にその指針を与えていると思います。

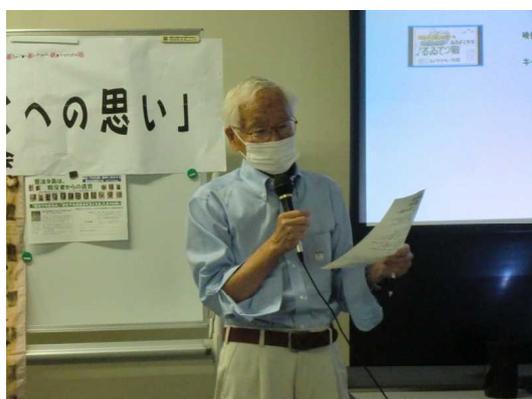
還ってきた日章旗7225



青木正雄さん7237



山田隆幸さん7228



会場：尾西生涯学習センター2F/G 7230



(2020.9.20 会場：尾西生涯学習センター 2F G会議室にて)